

【活動紹介】

ノンフォーマルな教育空間創造の試み
ー野殿・童仙房地域をフィールドとしてー

辻 喜代司

A Practice of Non-formal Education in Nodono-Dosenbo Area

Tsuji, Kiyoshi

京都府相楽郡南山城村野殿・童仙房地域と京都大学大学院教育学研究科（以下、教育学研究科）との連携による教育空間創造の実践については、これまで生涯学習をキーワードにしたさまざまな活動報告がなされてきた経緯があるが、本稿では実践のノンフォーマルな教育的側面に即した報告を行いたい。「ノンフォーマル教育」とはフォーマルな教育形態の枠外にあって、多様に組織化された教育活動全般をさす概念であるとともに、「各地の生活文化に根ざして多様に展開されてきた」¹歴史をもつ。

野殿・童仙房地域の生活文化に関する研究は、教育学研究科が関わったものだけに限定しても、「研究開発コロキウム」（大学院生主体課題探求・討論）による蓄積がある一方で、その成果を生かした教育活動はそれほど多くはない。そのなかで、2011 年に開催された「防災のつどい」は注目される。これは旧野殿童仙房小学校を会場として、前半では災害を想定した「談義」を行い、「炊き出し」体験をはさんで、1953 年の「南山城大水害」被災者の話を聞くという取り組みであった。地元防災組織の童仙房消防団をはじめ、多くの住民の参加を得たこの集会の研究的背景には、院生による共同研究「ライフストーリーを活用した地域生涯学習の実証的研究（2011～2012 年度）」があった。

このような取り組みの母体になっている組織が「野殿童仙房生涯学習推進委員会」である。地域の関係者ととともにその設立（2006 年）を主導した前平泰志教授（現名誉教授）は「教育学研究科と協定を締結したのは、正確に言うと、野殿地区、童仙房地区という地域とではない。野殿童仙房生涯学習推進委員会という任意団体を新たにたちあげたものであり、構成員は、野殿・童仙房住民および京大教育学研究科教員および学生である」²として、その組織原理が個人参加の原則にたち、委員長・副委員長は各区長が担うものの、地縁・血縁や行政からは独立したものであることを強調している。

今年度は前平教授の退任にともない「野殿童仙房生涯学習推進委員会」（以下、「推進委員会」）の存続自体が危ぶまれたところ、西平直教授とともに新たに渡邊洋子准教授の参画を得て、研究員が実務を担いながら事業を継続するという形での活動が始まった。野殿・童仙房地域では茶業を初めとする農業従事者が多いため「推進委員会」（役員会）も夜間になることが多い。茶業端境期の 5 月 8 日（金）にもうけた会議が始まったのは 20 時 30 分で参加者も桜井孝男副区長（童仙房区）および内藤浩哉氏（夫人とともに童仙房区で教育学研究科との連携関係を推進された方）と研究員の 3 名であった。この席では、今年度の「組長会」（区協議会）が検討している地震対策に関わるテーマで住民の学習会

を開催できないか、などについて話し合われた。席上「中山間地が震度 5～6 の地震に見舞われた場合どんなことが起こるのかについて知りたい」などの要望がだされた。

この話し合いにもとづいて企画したのが、10 月 3 日（土）実施（会場：旧野殿童仙房小学校体育館）のワークショップ「減災の集いー地震に備える」（教育学研究科教育実践コラボレーション・センター、「推進委員会」共催）である。企画のモデルとなったのは「防災のつどい」（2011 年）だが、それを継承・発展させるために「減災」という視点を導入し、新しい試みとして地域防災に関わる研究者の講演を入れることで、上記「役員会」の要望にも応えようとした。難航したのは研究者の招聘である。京都大学防災研究所などとも連絡をとるなかで、京都府福知山市で山地崩壊の調査研究を行いながら、自主防災組織会長も勤める小滝篤夫氏（京都府立大学生命環境学部非常勤講師、理学博士）が適任との情報を得、最終的に「南山城村の地質と活断層」という演題での講演を依頼できた。「地元住民の方と知恵を出し合う相互学習」（今年度「推進委員会」活動目標）に協力できるのであれば、との応諾であった。また、「推進委員会」の植田藤雄副会長（野殿区長）の開会挨拶、渡邊洋子准教授による挨拶・講師紹介も実現し、参加者は野殿区、童仙房区の住民を中心に 34 名であった。ワークショップの司会進行は 2011 年「つどい」時のファシリテーターであった鏑純香特任研究員が担当し、後半の意見交流会（パイプ椅子の配置を対面式にした）では、田山区やニュータウンの地域防災関係者からの発言もあった。席上「水害の場合はある程度の予測が可能だが、地震の場合は異なる。地域の防災リーダーがいない時に地震が起こったらどう対応するのかなどを検討していく必要がある」（童仙房区副区長）など、中山間地特有の課題も指摘された。なお、教育学研究科の学部生・院生には、事前掲示でファシリテーターとしての協力を呼びかけた。今回の参加は 1 名にとどまったものの、今後の進展に期待がかかっている。

この「集い」と連動させる形で、10 月 31 日（土）にも小滝講師を招き、「大人と子どもの地学教室」（参加 16 名）を開催しているが、両ワークショップともに、童仙房区で子どもたちに遊びの場を提供しながら、定期的に住民に工芸・料理講座を提供している女性ボランティアグループ「ふれあい土曜ひろば」の多大な協力を得ている。「推進委員会」の活動を通して形成されてきたこのような住民との協力関係が、今後の「ノンフォーマル教育」実践の充実に欠かせないものであることは言うまでもない。

¹ 丸山英樹・太田美幸編『ノンフォーマル教育の可能性』新評論、2013 年、92 頁。

² 京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター『風と雲のクロニクルー野殿・童仙房プロジェクト 2006～2015ー』2015 年、149 頁。